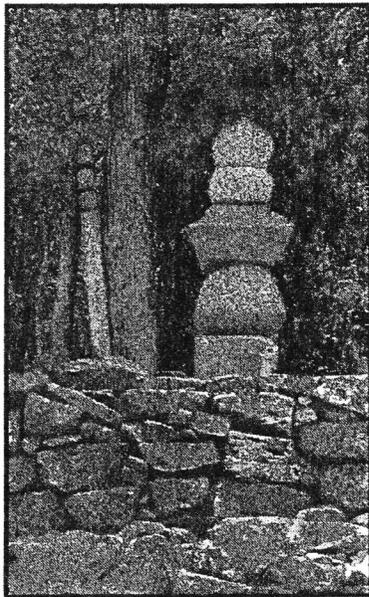
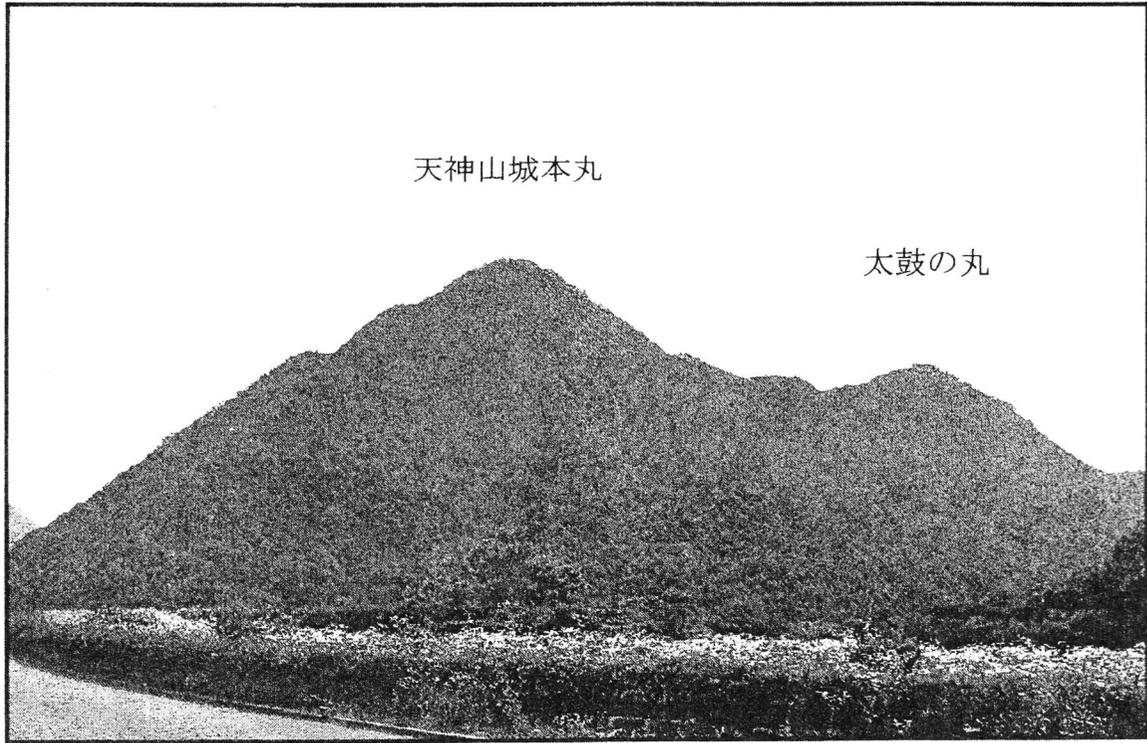


11月バス例会

# 晩秋の備前天神山城跡を下る



伝 浦上与次郎の墓



旧閑谷学校講堂

平成16年11月21日（日）

主催 備陽史探訪の会 担当 小林浩二



## 時間割行程表

	時	分
福山駅北口集合 -----	8	15
福山駅北口出発 -----	8	30
福山東インター -----	8	50
瀬戸パーキング着 -----	9	40 (トイレ休憩)
瀬戸パーキング発 -----	9	50
和気インター -----	10	00
和気美しい森着 -----	10	20 (トイレ有)
美しい森発 -----	10	30 (ここから徒歩)
太鼓の丸 -----	10	50
石門 -----	11	00
堀切 -----	11	15
天神山本丸着 -----	11	30 (昼休憩後希望者のみ百貫井戸跡へ案内)
天神山本丸発 -----	12	40 (簡易トイレ有るが -----)
天瀬侍屋敷跡 -----	13	20
天石門別神社 -----	13	30
浦上与次郎の墓 -----	13	40
天石門別神社 -----	14	00 (バスに乗車)
旧閑谷学校 -----	14	30 (トイレ有)
旧閑谷学校 -----	15	30
浦上村宗の宝篋印塔 -----	15	40
備前インター -----	16	00
福山東インター -----	17	00
福山駅北口着 -----	17	20

浦上氏関係略年表

一三五五	文和四年
一三七四	文中三年
一四四一	嘉吉元年
〃	〃
一四五八	長祿二年
一四六七	応仁元年
一四六九	文明元年
一四七一	文明三年
一五〇二	文龜二年
〃	〃 七月
一五二一	大永元年
一五三〇	享祿三年
一五三一	享祿四年六月四日
〃	〃
一五三二	享祿五年四月九日
〃	〃 七月二十日
〃	天文元年七月下旬
一五三三	天文二年
一五三四	天文三年六月
一五三六	天文五年
一五三七	天文六年

浦上宗隆、備前守護代（三石城主）  
 浦上宗安、備前守護代（三石城主）  
 浦上則宗、備前守護代（三石城主）  
 赤松満祐、六代將軍足利義教暗殺（嘉吉の乱）  
 赤松政則、神璽奪還の功により加賀半国の守護として再興  
 （応仁の乱）  
 赤松政則侍所の所司となり、浦上則宗は所司代になる  
 赤松政則、播磨・備前・美作の守護職に任じられる  
 浦上則宗三石城で病死  
 浦上村宗、備前守護代（三石城主）  
 浦上村宗、赤松義村を討つ（浦上氏の全盛期）  
 浦上宗景、備前東部・美作二郡の国守となる  
 村宗、細川・三好軍と戦い摂津中島で討死、伊里木谷に葬る  
 宗景、太鼓丸築城開始（第一期工事）  
 宗景、播州室津城より太鼓丸城へ移る  
 浦上政宗、三石城・富田松山城攻撃  
 宗景と政宗、片上の葛坂にて戦う  
 天津社を山麓に移し天石門別神社と称す、天神山城築城開始、本丸・二の丸  
 ・飛驒の丸・馬屋の段・南櫓広の段を構築（第二期工事）  
 砥石城主宇喜多能家、島村豊後守に襲われ自害  
 宇喜多興家病死、その妻宗景の室に仕える  
 天神山北麓に小屋屋敷を造る

一五三九	天文八年
一五四三	天文十二年
〃	〃 八月
〃	〃 八月
一五四四	天文十三年
〃	〃 十一月
一五四五	天文十四年
一五四九	天文十八年
一五五一	天文二十年
一五五三	天文二十二年
一五五九	永禄二年
〃	〃 八月
一五六〇	永禄三年
一五六一	永禄四年
一五六二	永禄五年
〃	〃
〃	〃 八月吉日
一五六三	永禄六年
一五六四	永禄七年七月十二日
一五六五	永禄八年三月
一五六六	永禄九年
一五六八	永禄十一年

天神山城増築、桜の馬場・鍛冶場・大手門・百貫井戸・長屋の段を構築（第三期工事）

天神山城増築、三の丸・西櫓台・下の段を構築（第四期工事）

宇喜多直家、宗景に仕える（十四歳）

宗景、赤松晴政と播州にて戦う

直家に乙子城・禄三百貫を与える

尼子勢美作に進入、三星城主防戦

浮田大和、備中に内通、直家に討たす

浦上松之丞誕生、与次郎宗辰と称す

宗景の命により直家、沼村龜山城主中山備中の娘を娶る

尼子晴久美作に侵攻、浦上軍応戦し撃退す

宗景の命により直家、龜山城主中山備中（直家の舅）・砥石城主島村貫阿弥を倒す

長船孫右衛門尉清光、宗景のため作刀

（桶狭間の合戦）

宗景、龍ノ口城を攻める

金川城主松田将監、宗景と和睦し、直家の娘を娶る

室城主政宗父子、赤松方の宇野下野守に暗殺され、次男清宗相続す

長船孫右衛門尉清光、宗景のため作刀

宗景の命により三星城主後藤勝元、直家の娘を娶る

宗景、龍ノ口城を兵糧攻め

長船孫右衛門尉清光、天神山において宗景のため作刀

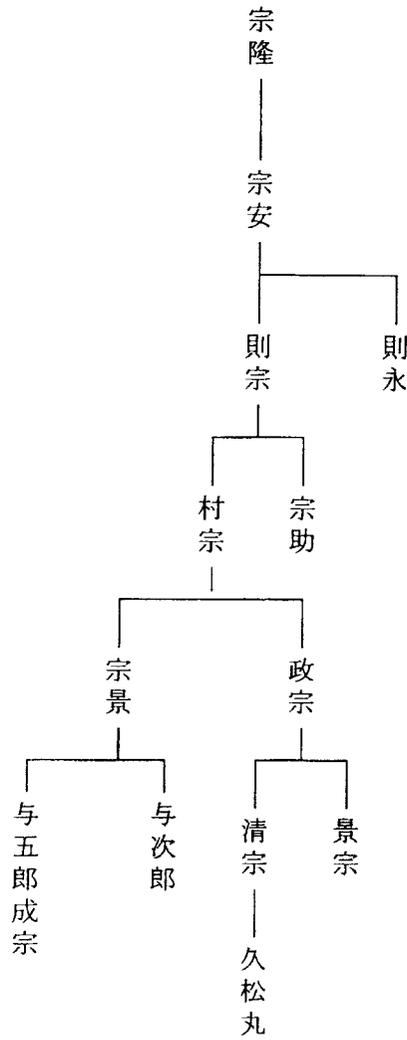
直家、尼子と組したため、宗景、毛利に援軍依頼

宗景、直家と不和になる

一五六九	永祿十二年	二月
一五七〇	元龜元年	
一五七一	元龜二年春	
一五七三	天正元年	
一五七四	天正二年二月七日	
一五七五	天正三年十月	
一五七六	天正四年	
一五七七	天正五年四月十二日	
〃	〃	五月六日
〃	〃	五月十一日
〃	〃	八月十日

直家、金川城を攻め松田元輝・元賢父子を討つ  
 (織田信長上洛)  
 直家、伊部城・富田松山城を攻略す  
 長船源兵衛尉祐定、宗景のため作刀  
 宗景、金川城を攻撃  
 宗景、直家と和睦し直家の娘を与次郎の妻に迎える  
 宗景、織田信長に拝謁し、播磨・備前・美作三国所領の朱印を賜る  
 直家、沼城より岡山城に移る  
 直家、播州小塩城おきしおの浦上久松丸(九歳)を奉じて、宗景攻略を謀計する  
 (室町幕府滅ぶ)  
 宗景、信長の援により毛利輝元と戦う  
 宗景の臣直家、毛利と和睦し宗景と断つ  
 直家、宗景配下の伊部鯛山城を攻撃  
 信長、天神山城へ兵糧を送る  
 宗景の四男与五郎誕生  
 日笠の青山城、直家に攻められ落城  
 与次郎、舅直家に毒殺される二十九歳  
 与次郎、長福寺の僧により川本景山に葬られる  
 天神山城落城  
 宗景播州に逃れる  
 宗景の内室妙源院、田原村で没す  
 宗景の娘、日笠下山中で自害  
 四男与五郎(二歳)、乳母と共に邑久郡飯の城主高取備中に託す

備前浦上家略系図（浦上家系図は十数種類あると云われているが『三石町誌』記載に従う）



宗隆 守護代、文和四（一三三五）年〜明徳年代（一三九三）

宗安 守護代、永享年代（一四二九）、嘉吉元（一四四一）年没

則宗 守護代、永享九（一四二九）年生〜文亀二（一五〇二）年没

宗助 守護代、

村宗 守護代、惣領家を継ぐ、文亀三（一五〇三）年〜享禄四（一五三一）年没

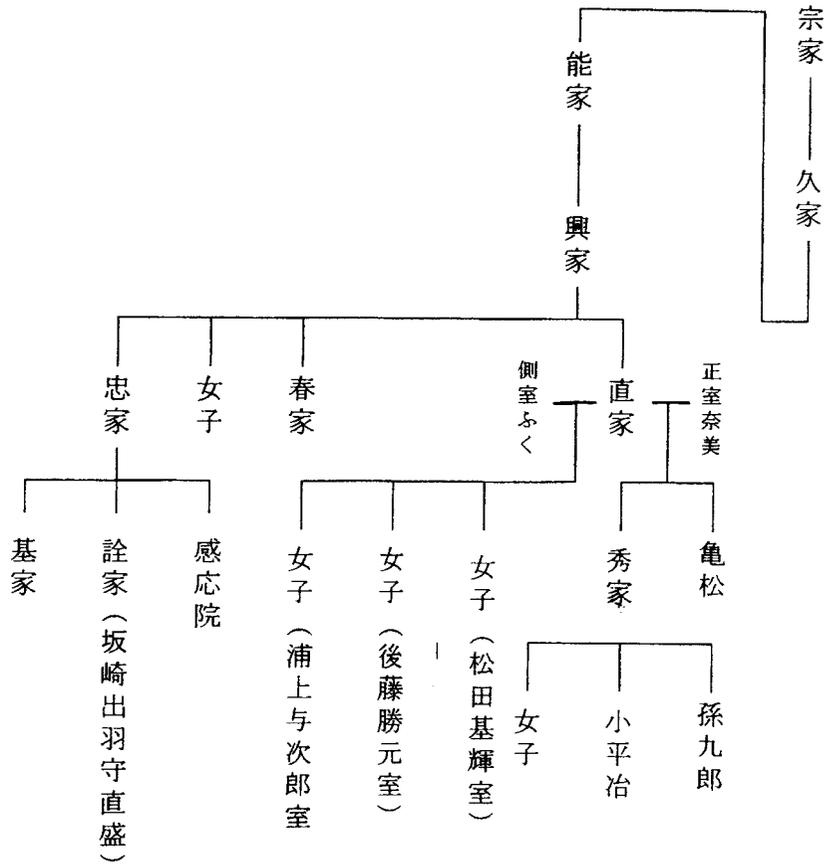
政宗 室山城主、永禄七（一五六四）年没

宗景 天神山城主、享禄五（一五三二）年〜天正五（一五七七）年出奔

与次郎 天正五（一五七七）年没

与五郎 天正五年、乳母と共に邑久郡飯の城主高取備中を頼る、東須恵浦上祖

宇喜多氏系図



能家 備前守護代浦上氏の被官、天文三年（一

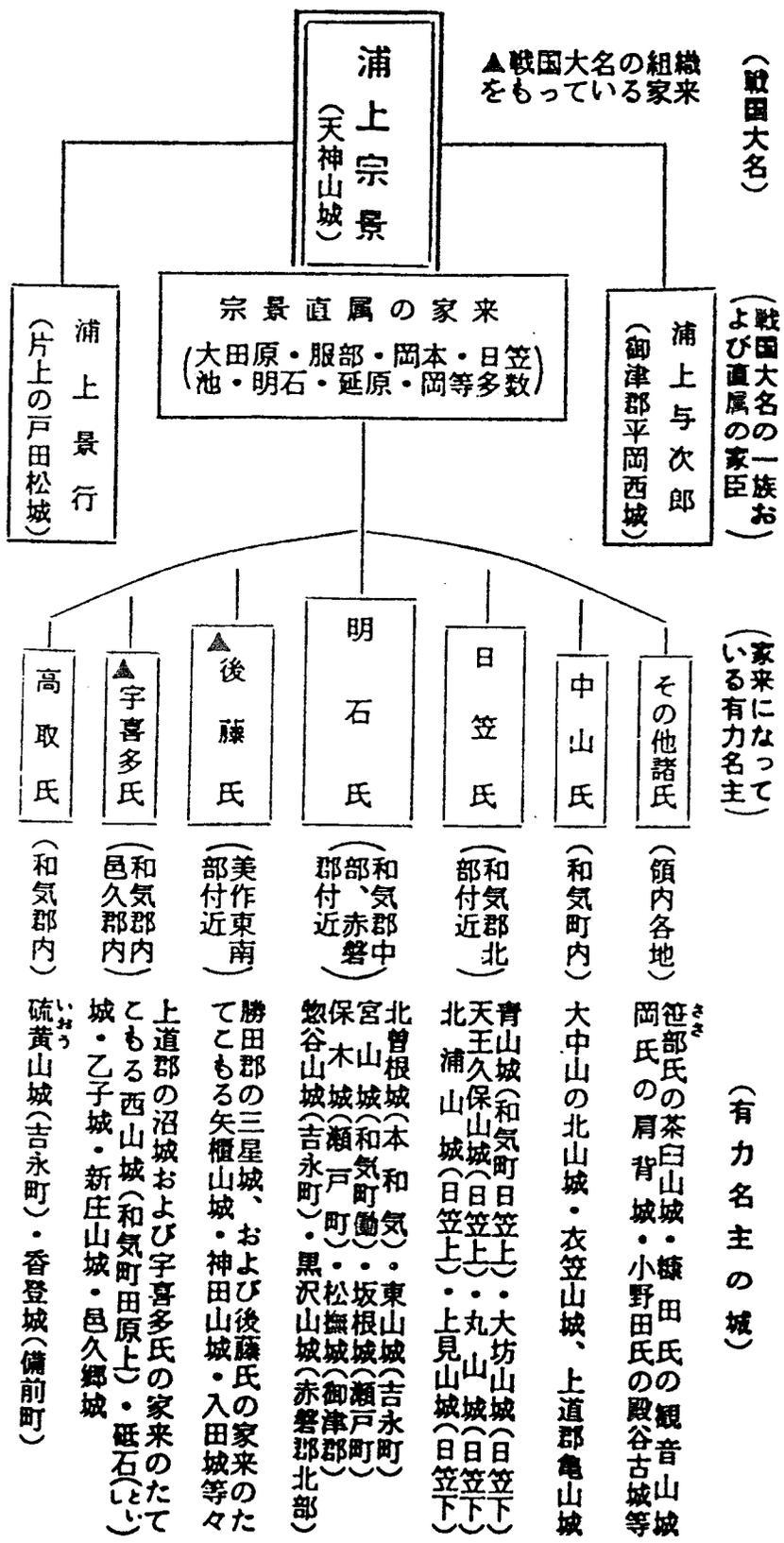
五三四）島村豊後守に攻められ砥石城にて  
自刃す。

興家 天文五年（一五三六）頃横死す。

直家 主家浦上氏を滅ぼし備前・美作の大半を  
手中にする、毛利氏と交戦中の天正九年（一  
五八一）二月十四日、岡山城にて病没五十  
三歳。

秀家 豊臣秀吉の信任を得て五大老に列せられ  
たが関ヶ原の戦に敗れ八丈島に流刑、明暦  
元年（一六五五）十一月没八十四歳。

戦国大名浦上氏の支配の仕組み（永禄年間頃「備前軍記」「天神山記」「三星軍伝記」「岡山県通史」）



## 浦上宗景と宇喜多直家

浦上氏はもと播磨国浦上庄の地頭から身を起こし、南北朝の頃より守護赤松氏の有力な被官であった。応仁の頃からは赤松氏のもとで守護代をつとめ、三石城を中心に東備に勢力を張っていた。永正の頃赤松氏が衰えると、浦上村宗は、赤松義村を大永元年（一五二一）に殺害して西播磨地方をその支配下に入れた。しかし細川管領家の内紛に敗れた細川高国を助けて各地に転戦したが、享祿四年（一五三一）天王寺の戦に討死し、その嫡子の政宗は播磨の室津城へ、次子宗景は天神山を本城としてその地方の経略にあたった。やがて政宗は、宗景の属城であった三石城、一族浦上国秀の居城であった片上の戸田松城を奪取して、宗景と対立したが永祿五年（一五七三）播磨室津で、赤松方の旧臣宇野下野守に暗殺された。

一方天神山にいた宗景は、備前南部より宇喜多直家、備前西部・美作より毛利氏の進出に脅かされたため、織田信長の威勢に頼ろうとして、好みを通じ、天正元年（一五七三）備前・美作・播磨の所領安堵の朱印状を信長から得た。

宗景が天文二年（一五三三）天神山に城を構え、天正五年（一五七七）の落城の時まで約四四年、おもな家来は、一族の御津郡平岡西城主浦上与次郎、片上戸田松城主浦上景行をはじめ直属の者としては、大田原実時・服部主膳・岡本龍晴・日笠頼房・日笠頼恒・日笠利左衛門・池土佐・明石景之・明石景親・延原弾正・岡越前守利季などである。また備前、美作地方の有力名主（地侍）で家来に組み入れられた者には笹部・中山・小野田、日笠・明石・後藤・高取・岡・糠田・宇喜多・松島などがあつた。彼等は山城を築き、土地の守りを固めていた。この中糠田与次右衛門は矢田観音山城主であつた。当時宇喜多直家は邑久郡沼城主で、他の家臣とは異なり、多くの名主（地侍）を率いて宗景に仕えていた。宗景の支配地域にはこうした複雑な家臣が多く住んでいた。これが後に天神山の戦いに宗景が直家に破れる一つの原因になつたと考えられる。

また宗景は短慮で家臣をあまり可愛がらなかつたと伝えられている。この性格が事実だとすれば、直家の謀略が容易に成功する条件がかなり揃っていたとも考えられる。

宇喜多氏は邑久郡豊原庄あたりの土豪であつたが、明応の頃になると、宇喜多能家は備前守護代浦上宗助・村宗の有力武将として活躍した。享祿四年（一五三一）浦上村宗が摂津天王寺に戦死した後、能家は故郷の砥石城

に隠退していたが、突如天文三年（一五三四）六月、浦上氏の武将で長沼庄の高取山城主島村豊後守の襲撃を受けて自刃した。能家の死後宇喜多一族は一時衰えたが孫の直家の時、浦上宗景の部将として再び勢力を増してきつた。永禄二年（一五五九）祖父能家の仇敵島村豊後守が沼城主中山備中守と結んで浦上宗景に背くと、直家は宗景の命を受けて、島村・中山の両氏を滅ぼして邑久・上道の農作地帯を支配下において、浦上宗景の一部将というよりは、戦国大名への道を軍事的経済的に大きく歩みはじめた。

永禄十年（一五六七）備中成羽の城主で毛利の部将三村元親らを上道郡沢田の明禅寺付近に迎え討って大勝し、旭川下流地域の有力国衆金光宗高・須々木豊前・中島大炊らを服属せしめて家臣として、備前南部における支配勢力を強固なものにしていった。さらに永禄十一年（一五六八）西備前の雄松田氏の本拠金川城に攻め入り、松田左近将監元輝・同孫次郎元賢父子を討ち備前西北部一帯の殆どを支配下に入れた。（『佐伯町史』より）

## 天神山の戦い

大きく戦国大名に成長した宇喜多直家は、備前統一の最後の仕上げとして、旧主君天神山城主浦上宗景に戦いを挑んだ。天正元年（一五七三）播州室津の城主浦上政宗の孫浦上久松丸に父清宗の仇である宗景を討つよう勧めた。天正五年（一五七七）宗景の子松之丞（与次郎、直家の娘婿）を岡山城に招いて、毒酒を吞ませて後死亡させた。現在岩戸宇河本の東北部の山麓に五輪の石塔があり、与次郎の墓と伝えられている。

天正五年八月直家は弟忠家らと数千の大軍を率いて父井原の国山付近から田原の西山城の線に陣を布き、数千の浦上久松丸の軍は天神山の搦め手より迫った。田土の鉄砲の段より鉄砲を撃ち矢を放ったが、太鼓の丸には依然として城兵が見張りを続け、本丸には宗景が控え全軍を指揮、二の丸・三の丸には宗景腹心の部下を配して雑兵を指揮した。亀の甲には投石のため小石を亀の甲の形に積み上げて置き、軍用石といって四メートル四方の巨大な岩石を敵に向かって転がせるように配置し、用水確保のため六メートル四方もある百貫井戸を掘り、雑兵の人員点呼をするため二〇メートル四方の石垣囲い（人柵）を作って敵襲に備えていた。

父井矢口城に陣した宇喜多方は矢田鉄砲の壇、幟尾に陣した軍勢と合流して天神山の背後に迫り、徐々に包囲

を縮めていった。その間足輕を出して城中の様子を探り、時たま鉄砲を撃ち合って、戦機が熟するのを待つという情勢であった。天正五年八月九日夜、嵐が烈しく吹き荒れると、突然城の一角から火の手が上がった。城兵が消火に向かうとまた一方から火の手があがる。本丸口にいた宗景を襲う城兵の一団が突然現れでた。火事と風、裏切り者と忠臣の一団の死闘数時間、夜明けとともに反逆組は宇喜多方の応援を得て大勝利を収めた。宗景は日笠頼房らの老臣数人と城を脱出して益原・和氣・大中山を経て、播磨へ落ちのびて行った。直家の謀略があまり兵力の消耗なくして天神山を制して備前統一をなしとげた。この戦いに参加した多くの部将・兵士たちの名前を天神山落城記などの史料を通して見ると、主な者は次の通りである。

日笠頼房 日笠頼恒 日笠利左衛門 大田原実時 大田原与三郎 服部主膳 後藤久之 後藤数馬 高原六郎  
林九郎兵衛 岡本龍晴 岡本龍家 池主殿 額田与次右衛門 下山正氏 管崎兵左衛門 奥山源六 久安三郎兵衛  
衛 松島 木村 田中 近藤 岩井 岡田 丸尾 青山 小堀 芦田 香中 頓宮 難波 福田 石田 西田  
岡田

途中から宇喜多方についた者

明石景之 明石景親 明石景季 延原弾正 池土佐 橋本四郎左衛門

### 戦いの記録

- 1、浦上実記
- 2、天神記
- 3、天神山記
- 4、天神山実録
- 5、天神山城実記
- 6、天神山落城記
- 7、備前軍記（土肥経平著）

（『佐伯町史』より）

## 天神山城

天神山城は、美作国から備前国東部を縦断して瀬戸内海に流れる吉井川中流左岸にある急峻な山塊の天神山山頂一帯に所在する典型的な連郭式山城で、総延長五〇〇mに及ぶ本城と約五〇〇m離れた出丸の城郭施設が構築されている備前国のトップクラスの城郭である。天神山は吉井川中流に位置し、美作国南部と備前国東部とを結ぶ河川交通の隘路かいりょを占めているが、足下に盆地や小平野、特別な産業地を控えているわけでもなく、また、戦国後期の山陽道からも遠く離れ、戦略的要衝とほど遠い地理的条件の地である。歴史的・地理的環境の見地からは必ずしも天神山を拠点にすることの要因を析出できないが、逆にいえば既存の勢力・体制や因習の規制にとらわれない所でもある。この城を中心にして戦国期後半の備前国の歴史が展開していることは事実であり、その意味では歴史的、地理的環境をしのぐ政治的利点が内在していたのかもしれない。

天神山城は、浦上宗景一代限りの居城であり、宗景の栄枯盛衰が城の歴史でもある。三石城を居城にして播磨国西部から備前国東部を領有化した戦国大名の浦上村宗が享祿四年（一五三一）大坂の合戦で討死し、跡目を長男の政宗が播磨国室津を居城にして継いだ

が、弟の宗景・国秀と不和になり、宗景が手勢と備前国東部の有力国人を引き連れて分立し、天神山に城を構えたことに城の歴史が始まる。同年末から翌五年の初めの頃に築城されたものである。そして、天正五年（一五七七）に宇喜多直家に攻められて落城するまでのわずか四十五年間が城の歴史であり、城主が数氏・数代に及ぶことの多い戦国期の主要城郭のうちでは稀な例である。しかし、一代四十五年間であったとはいえず、現存する城郭遺構は築城期のものとは考え難く、天神山城の城郭構造の発掘過程は、宗景が備前国から美作国南部を領有化した戦国大名に成長する過程の節目節目に従って改築され、最終的に現存する近世的城郭になったものと判断される。

天神山城の経緯はすなわち浦上宗景の経歴であり、その備前国内でトップクラスの規模と近世的構造との形成が、宗景の戦国大名への成長と一体をなしていると考えられるので、宗景の経緯について記述しておくたい。宗景が天神山に城を構えた時期は、この地域を支配していた戦国大名の息子とはいえず、跡目を継いだ長男からの一方的独立であり、備前国東部の有力国人層を掌握していたとはいえず、備前国東部の確固たる領有権を持っていたわけではなく、強大な城郭を構える力はなかったと判断される。分離後すぐの享祿五年に、宗景の兄の政宗は、離反した弟の宗景・国秀を討つた

め備前国に出陣し、宗景の持城であった三石城を攻略し、宗景に従う国秀の居城の富田松山城をも降して宗景と合戦を行い、勝負がつかずに帰陣している。この頃に本格的城郭構築がなされたとは考え難い。通説では、その後、政宗の勢力が衰え、もっぱら播磨国西部の領有権を確保するのが精一杯で、備前国東部は宗景が領有していたとされているが、天文年間（一五三二〜五五）までは政宗の備前国東部における執政を示す下知状や感状が残っており、分立後ほどなくして宗景の備前国東部の一円知行が完成していたとは判断し難い。天文十二年（一五四三）に備前国の名目的守護職の赤松晴政が備前国侵攻をはかるが、宗景はこれを撃退しており、この播磨勢対備前勢の合戦において、名目的存在であるにせよ守護職を撃退したことは、宗景の備前国における領主権を確立する一つの契機になったと考えられる。その後、同二十二年に出雲国の尼子勢が備中国北部を席卷し、美作国から播磨国北西部に侵攻した時に、宗景は美作南部の領有権の確保と備前国東部への尼子勢力の浸透を阻止するために、備前国・美作国の兵一万五千を率いて美作国に出陣し、尼子勢と合戦に及んでいる。合戦自体には敗れたが、軍勢が壊滅したわけではなく、尼子勢の引き揚げた後に奪われた美作国南部の諸城を取り返している。尼子勢への対応姿勢などからみて、宗景は天文末年頃には

備前国大半および美作国南部（吉井川沿い）の一円的な領有権を確立し、戦国大名の地位にあったと判断される。さらに、永禄三年（一五六〇）の史料に、宗景の父の村宗および兄の政宗の下知状を再認した宗景の下知状があり、この頃には完全に備前国領主権を確立していたものと考えられる。したがって、宗景の戦国大名としての確立は、天文末年頃に求めるのが妥当であろう。その後、宗景は兄の政宗の領地にも侵攻し、領地と家臣の大半を掌中に収め、元龜二年（一五七一）には上洛して織田信長に出仕している。しかし、宗景の盛期も、天文末年頃から永禄年間（一五五八〜七〇）までで、宗景の家臣であった宇喜多直家が、永禄二年頃から台頭しだし、備前国中南部を攻略して戦国大名に成長し、同十年頃からは公然と宗景に敵対するようになり、宗景の領主権は相対的に後退しだした。同年に宇喜多直家が、備前国西半を押領していた松田氏を滅亡させてからは、備前国の歴史的展開は、直家の戦国大名としての活動を中心に動くようになり、天正初年頃には戦国大名としての力関係が完全に逆転していた。やがて、天正五年（一五七七）に宇喜多直家は、天神山城に旧主浦上宗景を攻め、数日間の攻防戦のすえに宗景方に内応者を出させて落城させ、宗景を遁走させた。岡山平野を本拠地とする直家にとっては、天神山城は戦術的価値もなく、攻略後に廃城にした。遁

走した宗景の落ち行き先については諸説あるが定かではない。さて、以上の浦上宗景の動向からみて、居城の天神山城が担った存在意義は三期に分けられる。第一期は、分立直後のわか仕立ての居城期、第二期は天文十年代から末年にかけての戦国大名への成長期に即応した城郭形成期、第三期は永禄年間から天正五年の落城までの戦国大名として備前国および美作国・播磨国の一部に君臨した最盛期に即応した城郭形成期である。当然のことながら、現存する城郭遺構は第三期のものに比定され、永禄初年に構築されたものと判断される。

天神山城は吉井川中流左岸の急峻な天神山山頂に、上部建築物を除く城郭構造が完全に遺存し、各郭の基礎地形の大半が石垣構築である。縄張りには天神山山頂から北西に延びる尾根続きの別峰山頂(標高三三八m)にかけて細長い本丸を構え、本丸から北西の山麓に延びた尾根稜線上に控えの段を置いて、五郭からなる二の丸の郭群が縦列に連なり、ついで長屋の段と桜の馬場と称される尾根方向に沿う細長い郭が並ぶ。桜の馬場の郭は両側部に腰曲輪や二段構築の石垣や出曲輪、さらに山麓部への道が総合的に構築されており、大手曲輪と判断され、長屋の壇と桜の馬場およびその付属の曲輪とが大手曲輪の郭群と考えられる。大手曲輪の尾根先側には三段下って、三の丸と称される比較的大

型の郭を中心に大手曲輪に上がる二段の低い曲輪と、尾根先端側に下る二段の曲輪からなる三の丸の郭群が連なる。その先端は急峻で狭い自然の稜線が山麓へ延びている。本丸から南東に鞍部を置いて天神山主峰につながる尾根筋には、本丸から一段下る腰曲輪状の郭を置いた下に飛驒丸と称されるやや広い郭があり、その下に広の壇と称される細長い郭が連なる。広の壇の外側には、一段高い方形土壇と稜線に沿う細長い郭および南西山腹側の帯曲輪からなり南の壇と称される郭群(南の丸と仮称)が続く。南の丸の先端の下に稜線を切断した堀切が設けてある。堀切から鞍部を経て天神山主峰に至る尾根筋には、格別の城郭施設は認められないが、岩石露頭場所には城郭構築用石材の石切場の跡が数か所確認される。堀切から約五〇〇mの距離にあり、比高約八〇mの天神山主峰山頂の西端には太鼓丸と称される石垣構築の出丸が構えてあり、搦手筋の備えをなしている。城郭のプランは両山腹のそそり立つ急峻な尾根筋に、郭を縦列に連ねて天然の要害を利用した典型的な山城で、大手筋が本丸から山麓に下る稜線上の大手曲輪を経由して北東山腹側に至る道筋にあり、搦手筋が南東山続きの主峰側となっている。本丸は石垣構築で、長さ五五m×最大幅一七mの長方形を基本にした郭であるが、北東外郭線にひずみや張り出しなどの曲折を施し、歪いびつな形となっている。

本丸には建物の柱間の取れる礎石列は確認できないが、点々と礎石も遺存し、南寄りに妙見小祠の所存する六m×四mの基壇があり、この付近に天守閣的な中心櫓が所在していたと推定される。本丸の北東側面に小腰曲輪が一か所設けてあるが、ほかには側面防備用付屬施設は配していない。本丸の南西側面の中央寄りに石段が取り付けてあり、石段は本丸南西側面の南半に設けてある犬走り状の通路を経て本丸南西下の曲輪に通じると共に、途中から分かれて山腹へ下り九十九折つづらおりの道を経て山麓に至る道筋に通じている。この道筋は山麓に門か番所の基礎地形と考えられる山寄せ状の石垣を伴い、本丸から吉井川へ至る通路である。本丸の二の丸側は、西側に歪みを施し、その側面を経て二の丸に至る道を設けている。二の丸は本丸との間に本丸から三m下った長さ一四m×幅一〇mの矩形の陥没した郭を置いて、この郭から一・五m上った長さ一六m×幅一〇mの胴張りの不整形な長方形をした石垣構築の郭で、本丸側に小櫓形、大手曲輪側に櫓か門の基礎地形と判断できる長さ四m×幅三・五mの矩形地形を施している。二の丸の大手曲輪側は、二m—一m—一mと三段にわたって下る石垣構築の郭が並び、その先に三・五m下って幅広い石垣構築の腰曲輪を設けている。各郭の構成状態からみて、その腰曲輪までが二の丸を中心郭にしたひとまとまりの郭群と判

断される。二の丸郭群の両側面には、なんらの付屬的防備施設を配していない。二の丸郭群の尾根先側に長さ三五m×幅八〜一〇mの石垣構築の細長い帯曲輪状の郭を置いて、長さ七〇m×最大幅二〇mの截頭砲弾形の石垣構築の大手曲輪が続いている。大手曲輪は北西山腹側に櫓形の突出や歪みによる外郭線の曲折を施すと共に、下側に犬走りを置いた二段目の石垣や二か所の石垣構築の腰曲輪を備えている。北東山腹側は北半が鉤形に張り出し、突出部の下側に石垣構築の大型腰曲輪を設け、この曲輪の比高一〇m下に大手通路の土壇築成の出曲輪を構えており、鉤形の屈折部に小櫓形を設け、ここに山麓からの通路（大手道）が取り付いている。また、南東角には櫓形状に突出する石垣構築の二段構成の腰曲輪を備えている。大手曲輪の上は、北西半分が一段高くなっていて多くの礎石が残っており、特に三の丸側端面部付近に礎石列が残り、この高まりに建築物を集中して設置していたと推定される。大手曲輪の先は、比高三・五m下って、二段に低く下る石垣構築の腰曲輪状の郭を置いて、三の丸と考えられる長さ二六m×幅一五mの石垣構築の大型郭があり、この郭の先端に二間×三間の礎石・塚石の配列が遺存している。三の丸の先は比高四m下って台形の石垣構築の出曲輪があり、この下に比高五m下って長さ一三m×幅一七mの台形の石垣構築の郭があり、こ

の郭が城域端部をなしている。大手曲輪直下の郭から端部の郭までの三の丸郭群も、両側面に付属的防備施設が配備されていない。

本丸の南西側（主峰側）尾根筋は、比高三・五m下って長さ一六m×幅一六mの方形の郭およびその外に一・五m下って長さ二四m×幅八・一七mの細長い台形の郭（飛驒丸）、さらに二・五下って長さ二三m×幅八mの細長い郭と、本丸背後を固める石垣構築の主要郭を三段に備えている。この郭群にも両側面の付属的防備施設は備わっていない。三段の郭の先は比高が



三m高く、長さ六m×幅七mの方形の土地を中心に、尾根筋側に三m下って長さ二九m×幅四・二六mの一部に石垣を伴う細長い郭を設け、南西山腹側にも比高四m下って二段からなる長さ二二m×幅六mの湾曲した土地築成の帯曲輪を施している南の丸の郭群を配置している。南の丸先端から水平距離一三m、比高八m下って、上幅四m、長さ一三mの堀切を備え、本城の城域を画している。南の丸は人呼びの丘状の方形土壇を中心にした郭群で、土壇築成を主体にし、曲線の曲輪を伴うなど中世的城郭構造の面影を残すものである。出丸の太鼓丸は周囲を石垣で構築し、内部の二段構成になった単郭構造であり、東方尾根続き側に門と石段を構えている。東尾根筋には少し離れて簡単な平坦面と堀切が設けてあり、単なる出丸にしては入

念な石垣構築状態にあることからみると、この郭は出丸というより出城としての構築であったと考えられる。なお、太鼓丸の石垣（一部石塁）構築は、一部に本城の石垣と異なる古代の様相を示す大型石材の横積み認められる。

天神山城の水手としては、城内に井戸・池泉などの水利施設は確認されないが、大手曲輪から約五〇m下った北東山腹（長屋の壇の直下）に、岩場を穿つた径二・六mの井戸が所在し、城郭至近地に水源の確保をはかっている。古図によると、本丸の南西側山腹に百貫井と記されているが、現状では未確認であり、この井戸を誤記入した可能性が強い。

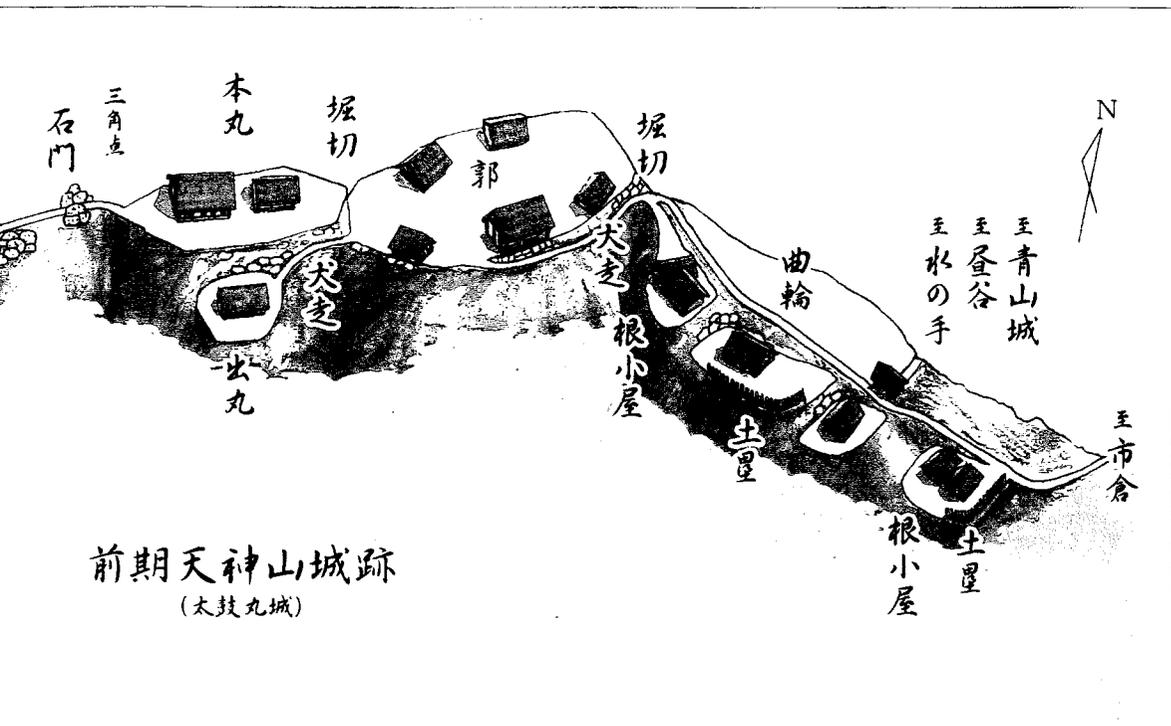
なお、天神山城の吉井川側山腹の城郭近くに、軍用石と称される根元に小石をかまして巨石を立て、有事に小石をはずして転落させる仕掛けも残っている。

さて、天神山城の城郭構造は南の丸を除くと各郭の基礎地形が石垣構築であり、瓦片と礎石の遺存から、上部構築物は中心郭と主要郭の要所要所に本瓦葺き建築物を設け、各郭の周囲を土塀で固めた半永久的構造体になっており、近世城郭の域に達したものであった。また、城郭の構成は本丸を中心にして南西に三段の郭からなる郭群、二の丸を中心にした郭群、大手曲輪と三の丸を中心にした郭群、南の丸の郭群と、本城が四か所の戦闘拠点を含む、拠点の多極化、つまり城郭の多元的防御構成を示し、この面にも城郭の発達状況が読み取れる。なお、現在三の丸と称される主要郭は、全体の構成からは大手曲輪の左翼を固める出曲輪の配備性にあり、二の丸・三の丸を本丸に次ぐ主要郭とする観点からは不適合であり、あくまで大手曲輪の中心

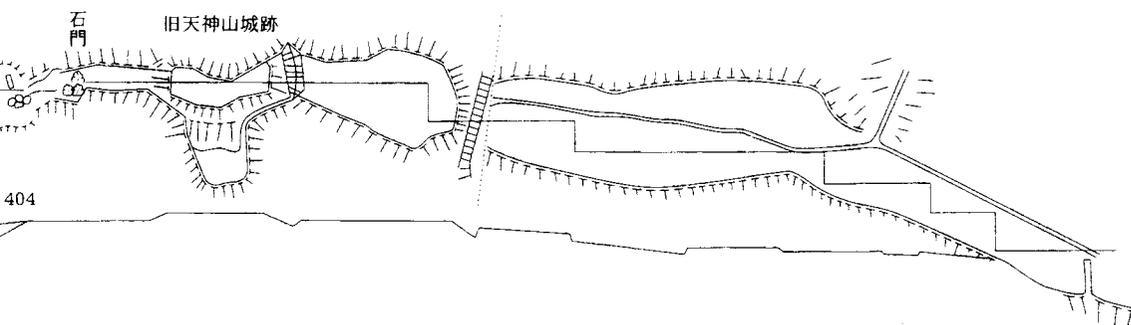
郭に伴う従属的な主要郭と判断される。この観点からいえば、本丸南西側の三段の主要郭群のほうが、三の丸としての条件にかなっており、そう想定するほうが妥当性が高い。

天神山城は近世城郭の内容を示すものであるが、立地からみても有事籠城型の性格を強く持ち、平時の政治の執務や日常生活の場は当然山麓の平地に構えてあったと考えられる。大手曲輪の東側山麓には小屋・木戸・鍛冶屋などの居館に関係したと推定できる地名があり、吉井川沿いの山麓にも番所跡をはじめ家中屋敷跡と称される所や、木戸・張木戸などの地名もあり、城山の両側の山麓に平時の根小屋・家臣団居宅・工房などの付属施設が設けてあったと推定されるが、それらの遺構は未確認である。ただし、天神山の北向かいの山麓に、浦上宗景の長男で宇喜多直家に毒殺された浦上与次郎の墓といわれる五輪塔が遺存している。あるいは、この墓が居館形成地からほど遠くない地点に設けられた可能性もあり、東山麓に居館の存在していたことを間接的に示す遺跡と見立てることもできる。

（『日本城郭大系 広島・岡山』より）



前期天神山城跡  
(太鼓丸城)

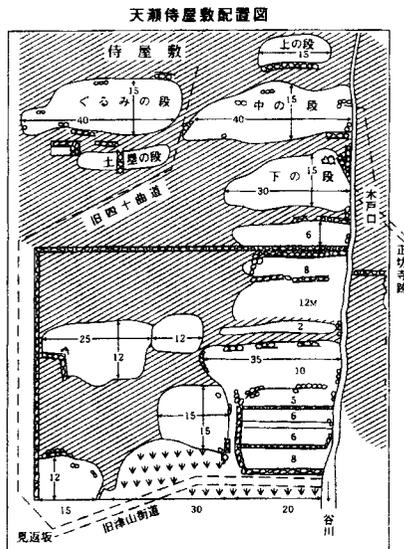


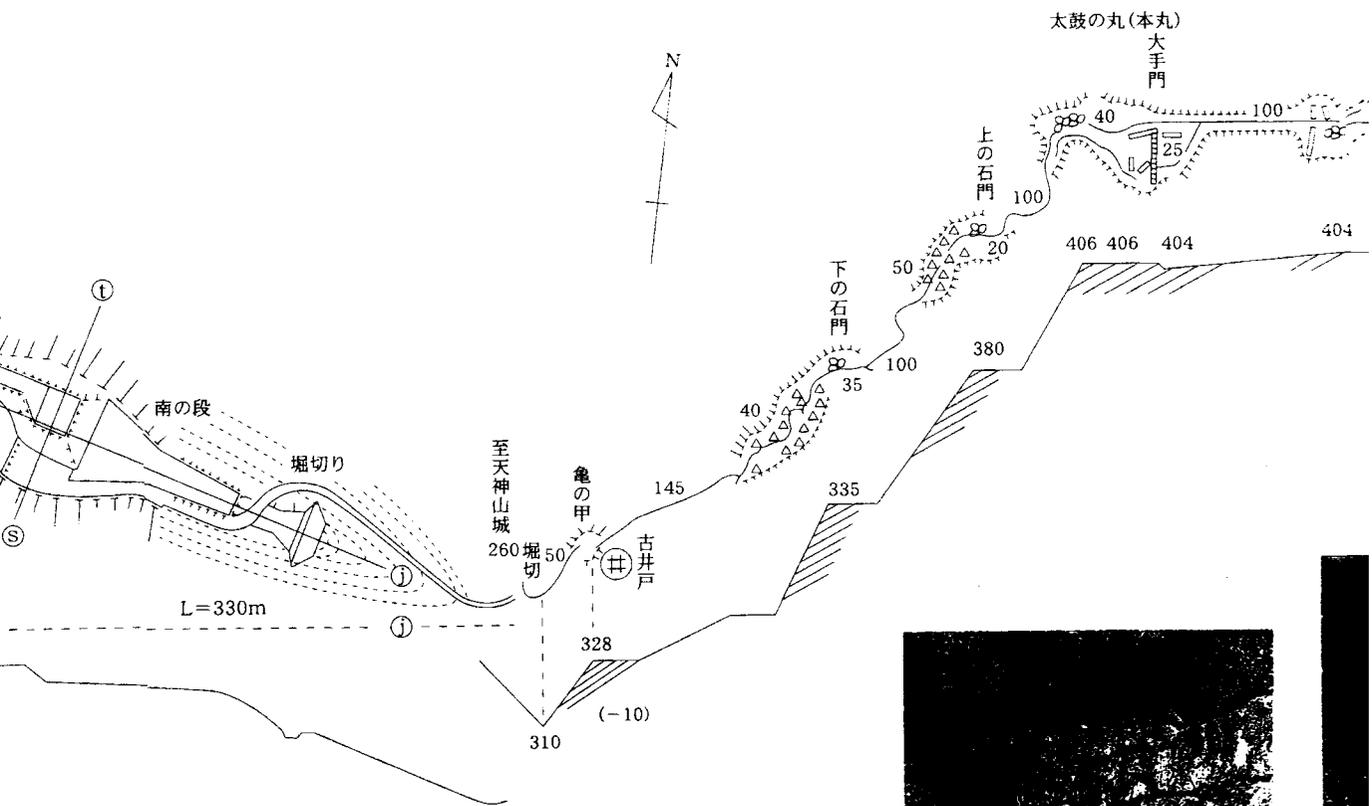
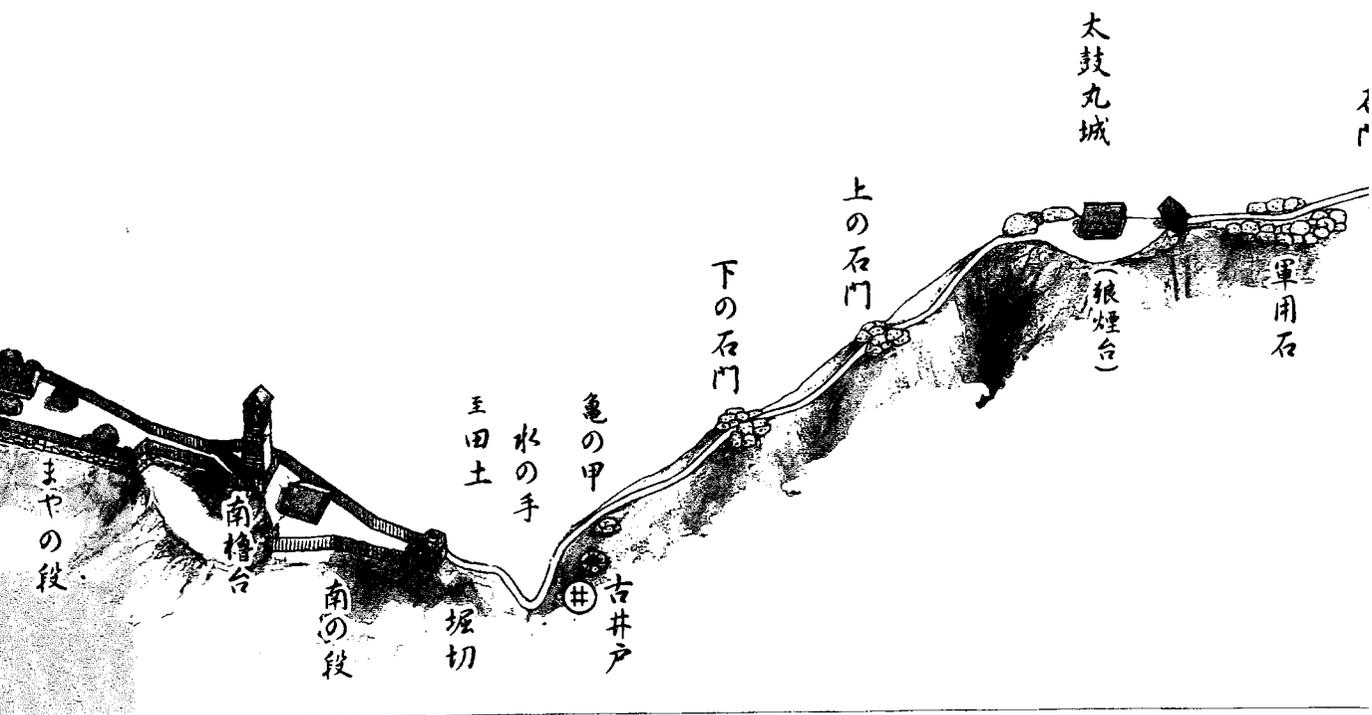
本丸跡



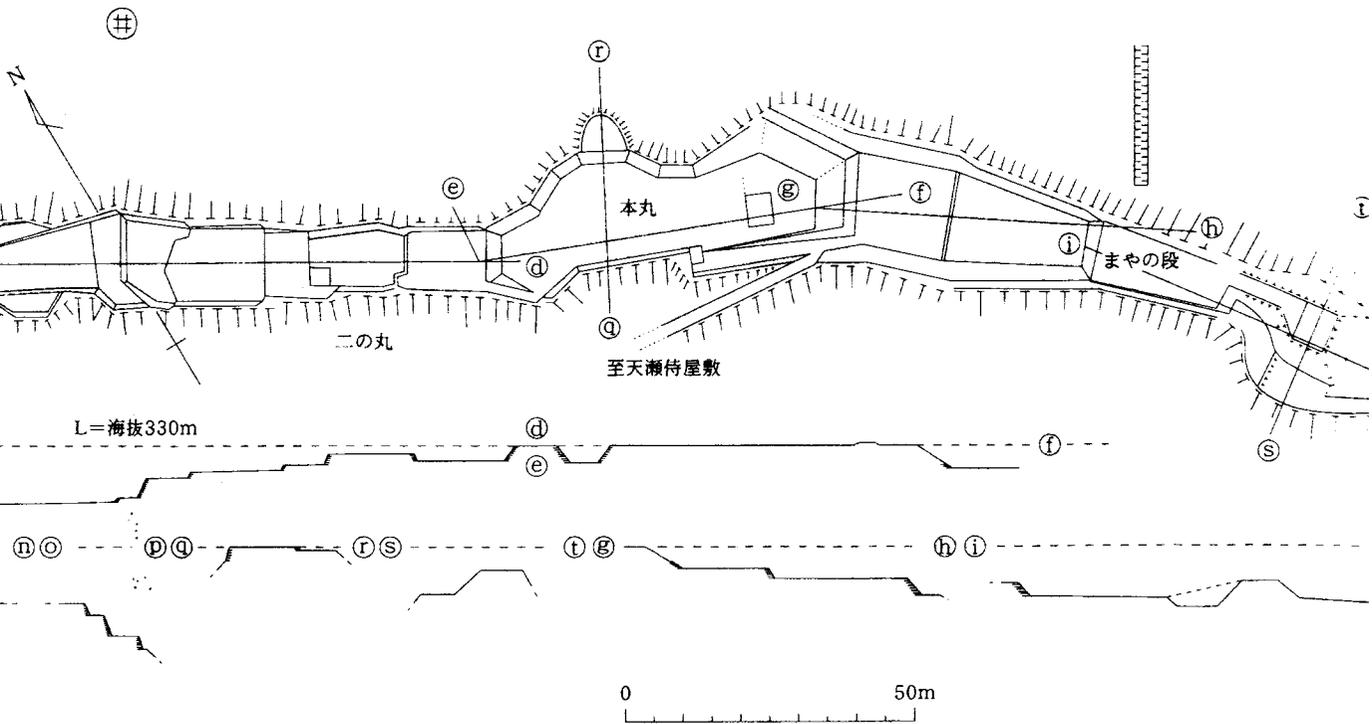
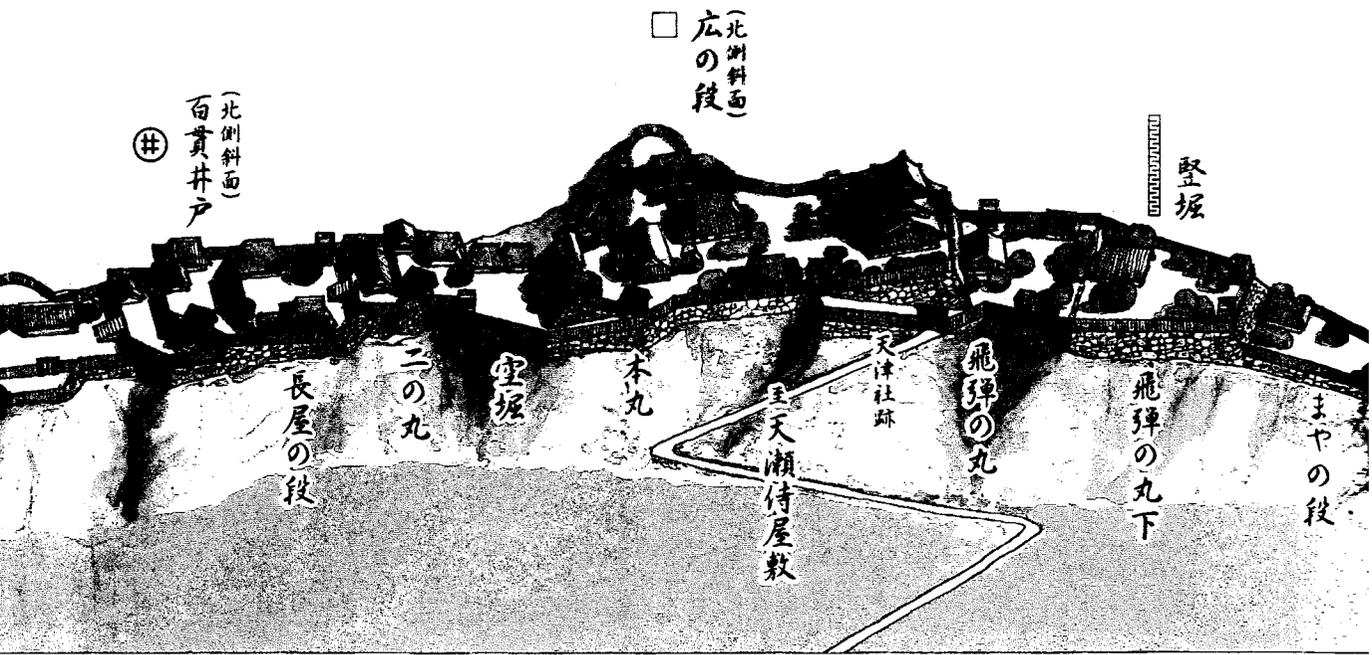
石門

普段は通路として用いられているが、戦闘時には土砂などで埋めることを前提として作られた小さな門。



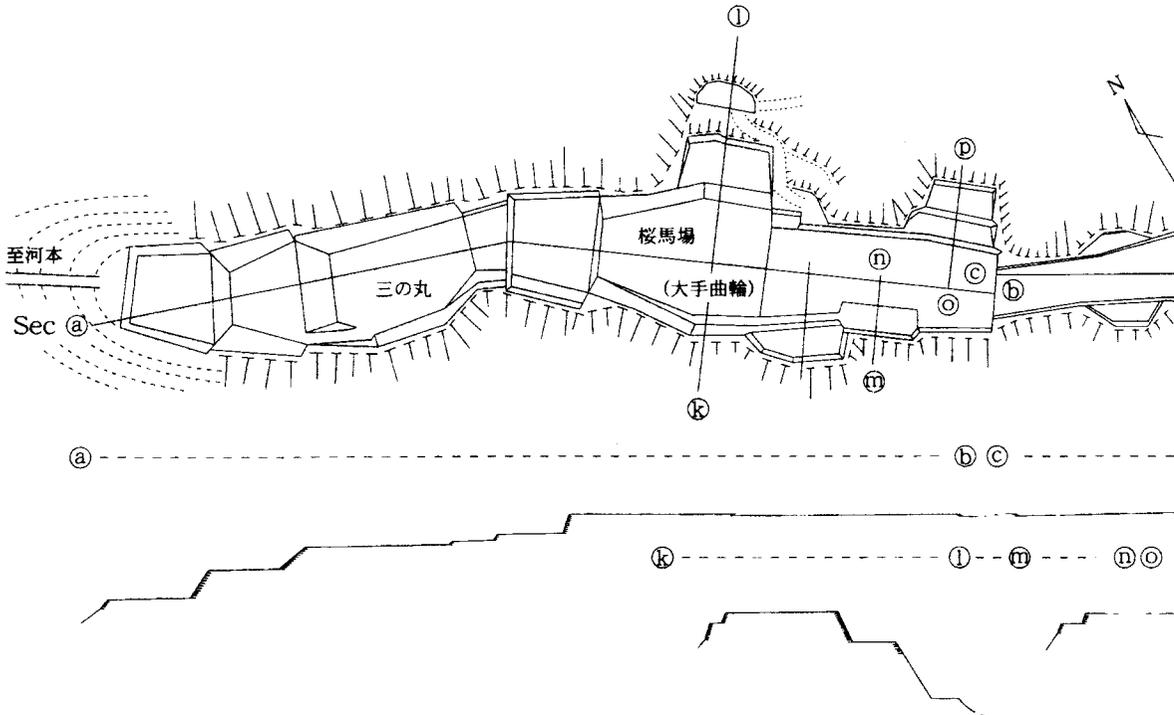
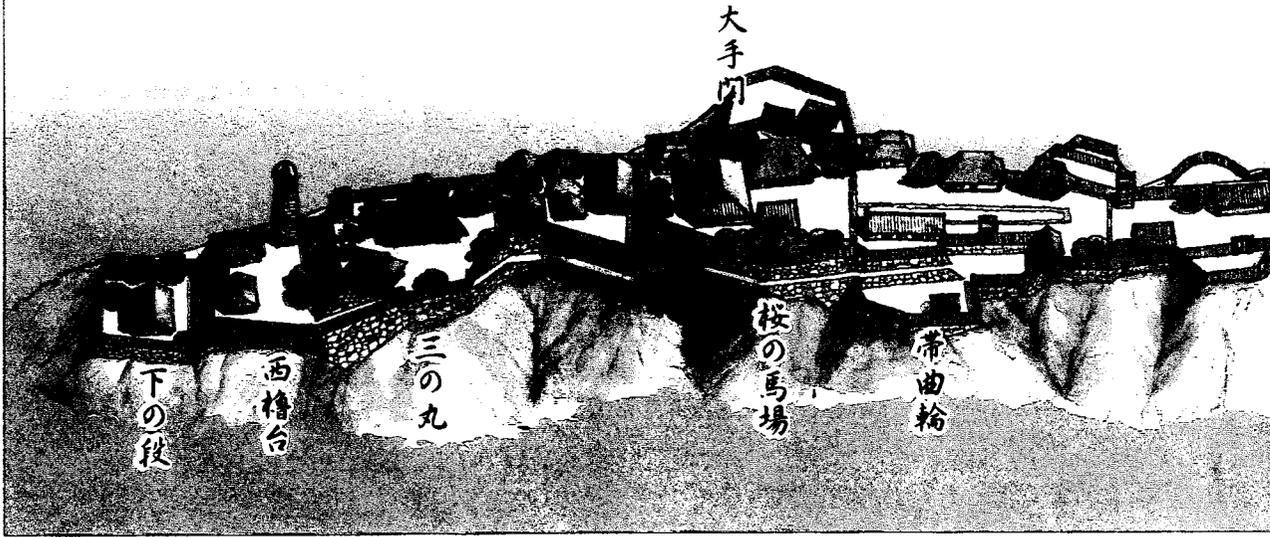


侍屋敷入口跡



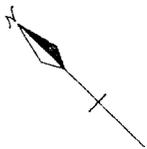
# 天神山城鳥瞰図

(天正初年頃の城郭構築物と復元的想定)



# 天神山天瀬待屋敷

縮尺 1:300  
1/200



## 旧閑谷学校

岡山県備前市閑谷にあり、はじめ閑谷学問所といわれ、明治時代以後は閑谷精舎・閑谷巒などと呼ばれたが、現在は一般に閑谷学校と称す。寛文九年（一六六九）岡山城下に完成した藩校（岡山学校）が「国学」、藩営の閑谷学校は庶民教育としての「郷学」であり、全国的にも創立は最も早い。好学の岡山藩主池田光政は、藩校の創設と前後して、寛文八年に「百姓小年の者学文（問）すべき所」として、領内郡中に一二三ヶ所の手習所を設置した。しかし、財政上の理由などから手習所は次第に削減、さらに全廃される羽目になり、結果的には閑谷学校に統合された。同一〇年光政は学校奉行津田永忠に、閑谷に学校設立を下命し、且つ、この学校を後世まで存続されるように指令した。土木功者とうたわれた永忠は、卓越した技量を駆使し、自ら立案建議した社倉米の制度による財源を活用し、学校建造に精緻善美をつくした。また、独立した学校領（学田・学林）を設置して下作人の制度を作るなどして、学校の永世存続の使命を果たす処置を講じた。延宝二年（一六七四）ころまでに一応竣工したが、さらに改築・整備が施され、全容が完成したのは着工三〇年後の元禄一四年（一七〇一）である。入学者は庶民の子供を主体とし、家中武士の子弟および他領者も含

まれ、在学者数は三〇〇五〇名、藩校と同様に正統派の朱子学を守り、課外には教授役などの自宅での会読・研究が進められた。ここを訪れた横井小楠は「江戸の聖堂之外は、天下に如此壯麗之学校は御座あるまじく存ぜられ候」と感嘆したが、学校の名声はつとに全国に広まり、高上彦九郎・頼山陽・大塩平八郎なども来観しており、大島圭介・西周などの他領者も来学している。現在は岡山県青少年教育センター閑谷学校として、青少年教育の道場として活用されており、その遺構はほとんど完全に残存し、国指定の特別史跡、建造物は文化財の宝庫となっている。（国史大辞典）

講堂 元禄一四年（一七〇一）完成、桁行五間・梁間五間、一重、入母屋造、屋根はもとは黒色だったが、のちに備前焼の瓦に葺き替えられた、木組はすべて吹き漆仕上げ。（国宝）  
小斎 講堂の南西にある建物で、藩主が来校の時使

用した（国重文）

習芸斎・飲室・文庫 講堂の西にある建物（国重文）  
聖廟 一棟（大成殿・東階・西階・中庭・文庫・厨房・外門・繫牲石・石階・練塀・校門）（国重文）  
閑谷神社 池田光政を祀る、本殿・幣殿・拝殿・神庫  
・中門・繫牲石・練塀・石階（国重文）

## 池田光政

江戸時代前期の備前岡山藩主。幼名は幸隆ちたか、通称は新太郎、諡は芳列公。慶長一四年（一六〇九）四月四日岡山城に生まれ、父は利隆、母は榊原康政の次女鶴子。利隆は元和二年（一六一六）没し光政が遺領を継いだ。翌三年因幡・伯耆兩國三二万石へ減封されて鳥取に入城し、寛永五年（一六二八）本多忠刻と將軍徳川秀忠の娘千姫との間にできた勝子を娶った。同九年岡山城主池田忠雄は没し嗣子光仲が幼少だったので、幕命で因伯兩國と備前との国替となり、光政は同年七月岡山に入城して岡山城三一万五千二百石の実質的な藩祖となり、前後五〇年にわたって藩政の確立を主導した。彼は賢母と師傳の補導で明敏な天性が磨かれ治国の要諦を探求せんとする自覚から修学に志し、熊沢蕃山・市浦毅斎などについて特に儒学を究めて、仁政理念を藩政に体现するとともに、質素を本旨とする「備前風」を内外にひろめた。承応三年（一六五四）備前一帯を襲った大洪水で藩政が危機に直面したとき、地方知行制度を変革して家臣統制・領民直接支配を強化し、農政では仁政理念に基づいて役人を教導し、農民を撫育して民力を培養し、年貢増徴・小農民自立化を促進した。また、光政は稀な土木事業家で、新田開発には土木巧者の津田永忠を起用して、児島湾沿岸

に大規模な藩営新田を造成し、用排水路の開削にも努めたが、その経費の主体は永忠の建議による社倉米の利息であった。一方光政は政治と学問・教育の一体化の見地から士庶の教育に異常な熱意を注ぎ、全国に先駆けて寛永一八年（一六四一）家臣修学のため上道花島に「花島教場」を設け、これは寛文九年（一六六九）本格的な藩校に発展した。また、同八年庶民子弟のために手習所を各地に設置したが、これはやがて藩営の郷学としての閑谷学校に統合された。また、光政はその学問・思想の立場から寺院淘汰・神社整理・キリシタン神道請制度の採用など、大胆な宗教政策を断行した。天和二年（一六八二）五月二日岡山城内で没、七四歳。和氣郡和意谷（和氣郡吉永町和意谷）の墓地に儒法で埋葬された。

『儉過録』『帝鑑評』の著作、『大学』『中庸』『論語』の要語解や自筆『池田光政日記』のほか、儒書・歌書教典の筆写などきわめて多い。

（『国史大辞典』より）

## 浦上村宗の宝篋印塔

観応元年（一三五〇）北朝に属した赤松則祐が備前守護となり重臣浦上宗隆を備前守護代として三石城に派遣した、これが備前浦上氏の始まりである。

六代將軍足利義教の専制政治に疑心暗鬼になった赤松満祐は、嘉吉元年（一四四一）六月二四日、義教を自邸に招いて暗殺し、重臣浦上宗安とともに播磨に帰った（嘉吉の乱）。満祐は山名持豊に討たれ備前守護職は山名教之に与えられ、小鴨大和守が守護代として福岡（長船町）に入り、三石城には城番が置かれた。

長祿二年（一四五八）八月赤松氏の旧臣が、南朝から神璽を奪い返し、この功により赤松政則が備前新田庄と加賀半国の守護職を与えられた。応仁元年（一四六七）応仁の乱が起こると、赤松政則は播磨・備前・美作を攻略して、浦上則宗を備前守護代として三石城に入れ、松田元隆を西備前守護代に命じた。

則宗の跡を嫡男の宗助が相続して備前守護代になったが宗助は若くして病死し、次男の村宗が跡を継ぎ三石城（主し）になった。

守護赤松義村は永正一五年（一五一八）一〇月、久米近氏の讒訴を受けて、村宗討伐のため三石の船坂に兵を進めたが、浦上軍の奇襲を受け壊滅的な打撃を受け敗走した。村宗は管領細川高国と謀り、永正一七年

一一月に義村を隠居させ、その嫡男才松丸（七歳、のち政村）を擁立して播・備・美三国の実権を握った。

享祿三年（一五三〇）中頃、村宗は千余騎の軍を率いて摂津に上り、細川高国と共に、細川晴元・三好元長の連合軍と戦った。この頃赤松政村は美作に潜んでいたが、父の仇を討つ好機到来と思いい立ち、翌四年六月二日、村宗支援と偽って摂津神呪寺に布陣した。同

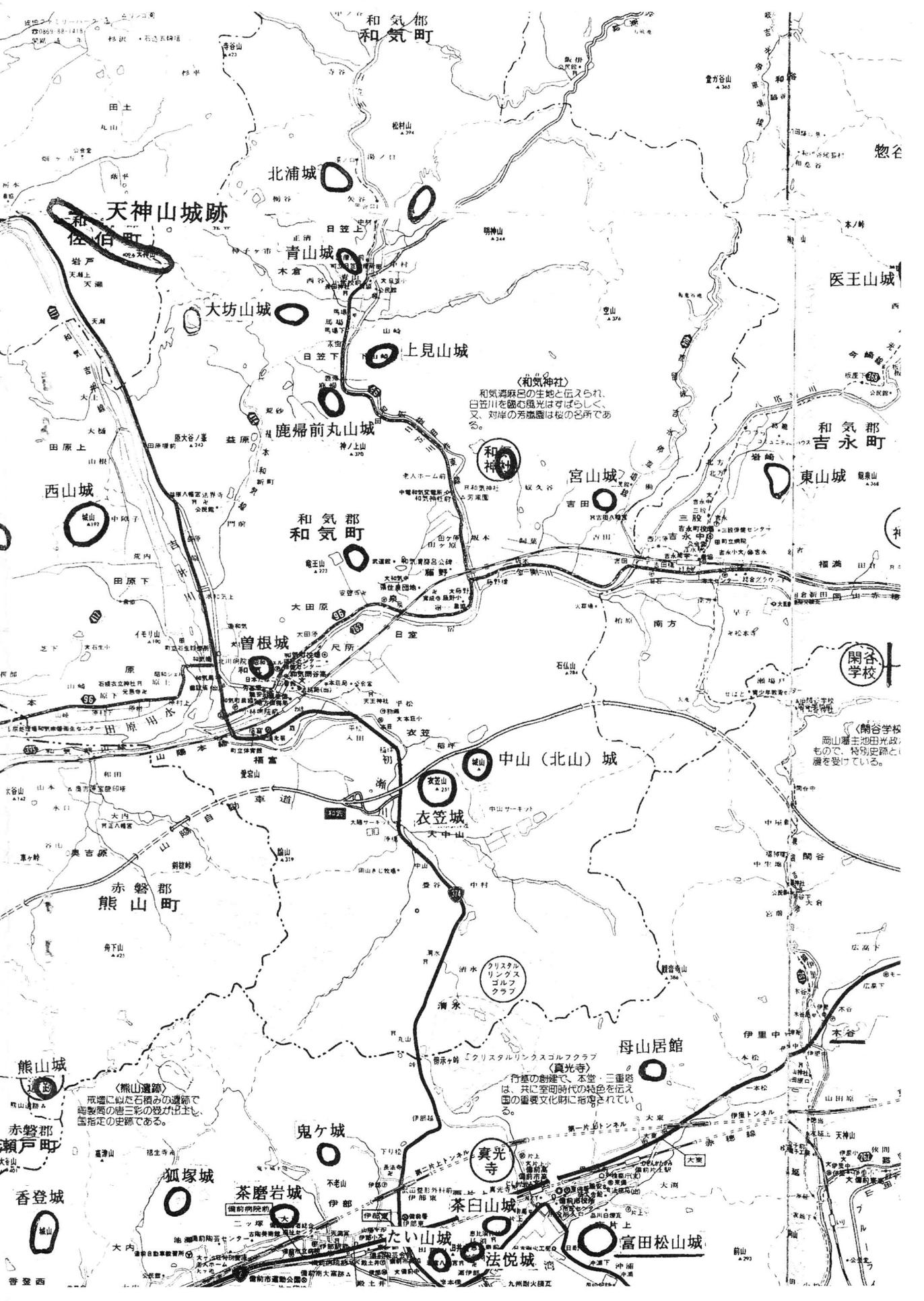
月四日、天王寺で村宗は三好元長と戦ったが赤松政村に攻撃されて村宗軍の中の赤松の旧臣達は政村の陣に走った。この戦いで村宗は戦死、高国は捕らえられて同月八日摂津広徳寺で自刃した。

村宗の遺児与四郎政宗と弟与二郎宗景は、父の遺骸を迎え、和氣郡伊里の木谷に葬り、播州書写山で法会を営んだ。

（『和氣郡誌』より）







和気郡  
和気町

天神山城跡

北浦城

青山城

大坊山城

上見山城

鹿埴前丸山城

和気郡  
和気町

宮山城

和気郡  
吉永町

東山城

曾根城

中山(北山)城

衣笠城

赤磐郡  
熊山町

母山居館

熊山城

赤磐郡  
瀬戸町

香登城

鬼ヶ城

狐塚城

茶磨岩城

真光寺

茶臼山城

たい山城

富田松山城

〈和気神社〉  
和気満麻呂の生地と伝えられ、  
白豆川を臨む風光はすばらしく、  
又、対岸の芳徳園は松の名所である。

開谷学校

〈開谷学校〉  
高山藩主池田光政  
もので、特別史跡と  
して選定されている。

行基の創建で、本堂・三重塔  
は、共に室町時代の特色を伝え  
る重要な文化財に指定されてい  
る。

〈熊山遺跡〉  
取壊しにいた石積み遺跡で  
高約5mの土壇の礎石が出土し、  
国指定の史跡である。